

発表4

弘智法印について

東北大学大学院 ジョン=モリス

要旨・序論

新潟県寺泊町の西生寺には、弘智法印（1363年没）とされる「即身仏」のミイラが安置されている。同仏は、およそ50年前に行われた学術調査によって14世紀のものと確認され、国内に現存する「即身仏」の中では最も古いものと言える。従来、湯殿山系即身仏については、関連する資料が少ないこともあり、各即身仏の細かい年代設定に関しては推論が避けられない状況にあった。しかし、現存する最古の即身仏であり、同系のなかでも比較的資料が豊富である弘智法印に関しては例外的であると言えよう。すなわち、弘法大師入定説から修験道にいたる即身仏をめぐる複雑な思想的背景を紐解くためには、この弘智法印に関する資料はさらに注目されるべきであると考えられる。

弘智法印に関連する資料の中には一部公開されていない資料もあるが、『弘智法印即身仏御縁起』を始めとする江戸時代の弘智法印伝記資料と、新潟県海雲山西生寺（智山派）における弘智法印信仰の記録は特に重要である。

以上の資料の中で特に興味深いのは、本発表の焦点とも言える貞享2（1685）年に成立し、江戸時代に人気を集めた浄瑠璃の一つ『弘智法印御伝記』である。弘智法印の没後250年に書かれた『弘智法印御伝記』は、弘智法印の生涯・思想・修行体系について必ずしも確実な情報のみを提供しないが、その内容は江戸初期の文芸と大衆的宗教思想を反映していると考えられ、本研究は『弘智法印御伝記』を通して、江戸初期の大衆的宗教における即身仏の捉え方を考察する試みと言える。さらに『弘智法印御伝記』の研究と平行して、平安時代から現代に至るまで、即身仏に関する文献資料のキーワードとなる「往生」、「成仏」、「弥勒」、「弘法大師」などに注目し、各資料における「理想的な死」、「仏になること」、「あの世」、「即身仏になる動機」といったそれぞれのテーマを考察する。従来の研究においては『弘智法印御伝記』の存在について言及されているが、内容の検討はほとんど行われていない状況にある。

本研究は、日本仏教において、聖なる人の遺体が腐敗しないことに関わる信仰および大衆的な聖人崇拜と、少数に支えられてきた即身仏になるための修行内容をそれぞれ理解する一つの契機となるであろう。また、本資料の考察によって即身成仏思想と弘法大師崇拜を思想的により幅広い聖人伝文学という文脈の中で捉えることができると期待される。本報告では、『弘智法印御伝記』に見られる弘智法印の伝説と崇拜形態を江戸期における日本の宗教のありかたと関連付けて論じたい。

『弘智法印即身仏御縁起』と弘智法印の生涯

法印という上位に上った弘智は下総国香取郡正木郷に生まれ、奥州・出羽を巡り、高野山での修行の後、貞治2（1363）年に猿ヶ馬場の岩坂に深入禅定の座を占めて亡くなった。その弘智法印の生涯についての情報は、西生寺の『弘智法印即身仏御縁起』（年代不明）に基づく。その資料の中で弘智法印が即身仏になる動機が叙述されている。末法思想の影響を受け、高野山においても納得することができなかつたようであり、高野山を去り即身仏になると「おおいなる決心」を行った。即身仏になることは以下のように描写されている。

- 「自身の肉体を残し、乱世の衆生を教化する」、
- 「われ、終焉の後は必ず遺身を埋葬する事なかれ、このままにして弥勒下生の暁を待つ」、
- 「宗教家としての救世の信念、弥勒菩薩が世に下り、末法の乱世を救えるまで、我が身を残してこの世を救わんとの信念、実に偉大なものである。」

弘智法印は以下のような辞世の句を残したらしい。

「いわ坂の主は誰そと人とはば 墨絵に書きし松風の音」

その「松風の音」は即身仏になった弘智法印の幼名、音松、をほのめかすと考える。

『弘智法印御伝記』やその以降に成立された資料は同様だろうか。本発表において、『弘智法印御伝記』に主眼を置きながら、江戸時代に大衆文学の主題となった弘智法印の姿が見えてくる。狩野文庫に保管されている先行研究が取り扱わない『弘智法印富阪廼松』という仮名草子（右の絵図ご参照）や弘智法印・西生寺への参詣を記録する資料にも踏まえながら、唯一の「文献文化的」即身仏と言える弘智法印の文化史を紹介する。その寺縁起など比較的広く読まれた資料にて、東北の文化はどのように見なされていただろうか。



『弘智法印御伝記』の背景、粗筋と思想的內容

貞享2（1685）に成立した『弘智法印御伝記』（内題は「弘知上人）」という説経本の現存している原典は一点のみである。本資料は大英博物館のコレクションの中核となったハンス・スローン（1660-1753）文庫に入っていたもので、もとはエンゲルベルト・ケンプファー（1651-1716）が日本で入手したものである。ケンプファーの自筆作品はJ・G・ショイツァーによって英訳されたが、元禄3（1690）年から元禄5（1692）年の在日の間に入手した書物の由来についての情報はない。「弘知上人」「他力本願記」の二点は、ショイツァーが作った目録には挙げられていないし、ケンプファーによっても言及されていない。通辞を介してあるいは出島のオランダ屋敷で働いていた日本人の手を経て集めたものと推測される。離日の際、ケンプファーの書物は没収されることはなかった。

「弘智法印御伝記」が出版された貞享2（1685）年は、古浄瑠璃や説経浄瑠璃が古浄瑠璃の最晩年期と言える。その後、竹本義太夫（1651-1714）の義太夫節が浄瑠璃の世界で優勢となる。『弘智法印御伝記』は江戸孫四郎の作品である。江戸孫四郎の生涯と全作品の情報は定かではない。『弘智法印御伝記』（または『弘知上人』）を扱う研究は非常に少ないが、横山重氏の『説経正本集』第三巻で解題がある¹。また、直接的に思想的内容を扱う研究はないが、劉慶氏の研究は『弘知上人』の創作様相を紹介し、『弘知上人』と『崙山上人』（『崙山上人之由来』）の構造的同質性を主張している²。劉慶氏が『弘智法印御伝記』「は弘智法印の出家、家族との離別、再会、お家の再興、上人の栄光を、六段に分けて描いた作品である」と説明する。『崙山上人之由来』との同質性から、『弘智法印御伝記』という劇は、即身仏信仰に直接的な関係がある資料、例えば弘法大師入定説の影響を受けたというよりも、その時の文楽の世界で流行っていた聖人の話の形によって形成されたと言えるであろう。この浄瑠璃の内容をより詳しくみることによって、このことは明確になる。

『弘智法印御伝記』の粗筋

初段において、法印（弘友）は、弥彦山麓の裕福な長者の家に生まれ、極度に遊興が好きであったため父親は悩んでいた。二段には、弘友を諫めるために遊里に来た父親から逃げるため、弘友は馬子を取替える。後で夫と見てすがり寄った妊娠していた妻は切り払われた弘友を恨んで死んでしまう。しかし、死ぬ前に子供を産み出す。弘友はその場所に来て、悲しむ。その後、自分の行為を後悔しながら、妻を埋葬し長男の千代若を両親の家に届けて、生まれたばかりの次男をその場に置き去る。

三段において、弘友は出家することを決心し、高野山に出発する。越後五智国分寺に宿泊する際、妻の幽霊と出会う。それから弘法大師が現れ、弘友は大師の弟子になり、弘知という名前を貰う。魔王は美女の姿で現れて高野山に向かっている弘知を騙そうとするが、弘知は魔王を無視し、高野山に上り修行をする。

四段において、高野山での7年を過ごした弘智法印は、故郷に戻り、父親が亡くなったことを知り、長男に親子関係を言わず弟子にする。

五段において、弘智法印と長男は馬の親子を連れて高野山へ向かう。道中に馬の親子が突然死んでしまい、法印が経を唱える。馬の死体の中から弘智法印の両親が現れて、法印は観音大師の化身で、即身仏になることを述べて天に昇る。

六段において、次男を世話していた狼は弥彦権現の化身であったことが啓示され、権現は女の姿で次男と一緒に現れる。法印は妻の七年忌の命日に二人の息子を連れて墓参りする。妻は墓から現れて、紫雲に乗って「成仏」する。次男は即身仏を安置する堂を建立すること、長男はその堂の住持になることを遺言し即身仏となって「往生」する。勅使が来て息子たちに偉い位置を与え、即身仏堂が建立される。

「往生」という用語の使用は、即身仏になることの意義の問題をめぐる、著しくなされているであろう。その用語は一般的に「死ぬこと」、特に僧侶や聖なる人が死ぬことを表すが、元々の意味は浄土や天国などで生まれ変わること (*Upapadyate*) である。しかし、即身仏というものは、死んではいけないはずである。あるいは（身体の中ではなく）浄土にはいけないはずである。文学において今生における善行や、宗教的行為によって極楽で生まれ変わるという意味を表す「往生」は、浄土教的文学において最も頻繁に見られるものである。浄土教的思想が弘法大師入定説に及ぼした影響と、平安往生伝集と近世往生伝集に見られる往生人の遺体が腐敗しない話（例えば『尾陽往生伝』中に記録されている尾張藩士小笠原三九郎の話など³）を考慮すれば、往生という用語の使い方が、即身仏の思想的背景と同様に大変幅広いものであると考えざるを得ない。その点にて、江戸期以前より世俗的でありながら「宗教的」テーマに関心する大衆的出版文化における即身仏の描写・理解が現されていると言えるだろう。

『弘智法印御伝記』は、簡単に浄土教的な作品として分類することができないし、真言宗における正当な教義や修験道の思想を表しているとも言えない。即身仏思想において、本資料の段階には弘法大師と即身仏の関係も明確になっている。しかし、弘智法印の話の思想的背景には、特別な聖なる人が生身・化身であることや、あの世とこの世の関係の理解を表す様々な仏教的な生と死に関するテーマがある。弘法大師の資料を含む即身仏と聖人の遺体が腐敗しないことに関する全ての資料は、その幅広い思想的文脈に属しているということを主張できる。『弘智法印御伝記』によれば、弘智法印は即身仏になってから神聖な人になったということではない。むしろ、法印は観音の化身で、（大衆信仰における弘法大師と同様に）生身でそもそも神聖であった。それは、貧困、飢饉や疫病で苦しんでいる信者たちの共同体のためにミイラ仏になろうとした湯殿山系即身仏とはかなり異なる様子であろう。

四一

本資料における弘智法印家族と家族の運命は、この浄瑠璃の重要なテーマの一つである。その家族の死後の繁栄を維持する宗教的責任は、江戸時代の宗教思想の代表的な一部である。また、この浄瑠璃を通じた宗教的な目的は、死あるいは死後に達成される。家族、あるいは家族の靈魂は、弘智法印から遠くはない。家族の一体性やアイデンティティは、弘智法印の死後も継続し、

彼の子供は彼を崇拜し続ける。本資料には、浄瑠璃で数多くの文飾や舞台上の奇跡的な様子が記録されているが、それにもかかわらず、その時代の宗教思想の質を表しているであろう。大いに流行しつつあった大衆文学や芸術が、江戸時代の死生観や死後観にどのような影響を与えたかという研究テーマは重要であろう。本資料において、即身仏になる宗教者が弘法大師を模範にするという傾向は、弘智法印が直接に空海の弟子になることで見ることができる。『弘智法印即身仏御縁起』とは異なって、本資料は断食など即身仏になるための修行を強調してはいない。それよりも、弘智法印は、観音の化身であるということが強調されている。即身仏になることが亡くなった両親によって予言されるが、弘智法印の即身仏になる決心が(往生人と同様と言えるだろうか)臨終の時のみに達成されていく。

『弘智法印御伝記』にみる弘智法印の伝説と崇拜を江戸日本の幅広い宗教世界に位置付けたい。『弘智法印御伝記』の思想的曖昧さを強調することによって、即身仏を容易に即身成仏思想と弘法大師崇拜から生じた現象として捉えることを避けることができる。本資料の考察によって、その即身成仏思想と弘法大師崇拜を思想的により幅広い聖人伝文学という文脈の中で捉えることができるであろう。弘智法印を紹介する江戸・明治旅行文学、『弘智法印富阪廻松』、と特に『弘智法印御伝記』を参照すると、遠いところの名所や風習への興味の高めることとともに、即身仏という厳粛な宗教的テーマをこっけいな様子や「大衆的な様子」で描写する傾向が見られる。本資料には、殉死、飢饉、殺人、疫病、断食などのようなテーマに関わる即身仏の文化史のより明るい側面が見えてくる。

著名となった弘智法印は、『弘智法印御伝記』が貞享2(1685)年に成立されてから江戸末期まで登場し続け、彼の評判はその間、継続的に広まっていった。

『弘智法印御伝記』にみる大衆的で娯楽を目的とする軽快かつ滑稽な内容は、文政5(1822)年に成立された墨川亭雪麿作『弘智法印富阪廻松』においても明確である。『弘智法印富阪廻松』には、西生寺の近く住んでいる幸薄き恋仲のふたりの話の中で、弘智法印とその入定を紹介している。

とくに、江戸期の旅行記・旅行文献における弘智法印の登場が著しい。弘智法印の旅行記・旅行文献登場の事例として、七月四日の件において曾良の西生寺参詣を記録する元禄2(1689)年及び元禄4(1691)年の日記を中心とする自筆の覚書である『曾良鬮行日記』がある。また、『弘智法印御伝記』とほぼ同時に成立された弘智法印を記す文献として、『曾良鬮行日記』に加えて、三千風著『日本行脚文集』がある。元禄3(1690)年に成立された『日本行脚文集』は、弘智法印の伝説を特に丁寧な、誠実に紹介している。

弘智法印のことや西生寺への参詣は、19世紀の旅行記・旅行文献にも記録されている。文化元(1804)年に成立された広瀬蒙斎著『白川風土記』や、越後が生んだ文人、橘昆福による文化8(1811)年成立の『北越奇談』、さらには天保8(1837)年成立された鈴木牧之の『北越雪譜』が弘智法印と西生寺を紹介している。

先行研究において、「弘智法印と、湯殿山系の入定信仰を直接に結びつける史料は今のところ

見当たらない」と指摘されている⁴。しかし、直接的な関係はないかもしれないが、文献資料がほかの即身仏に比べて豊富であり、最も知られた即身仏であった弘智法印は、江戸期の即身仏修行を理解するうえで、重要な存在であろう。

近世日本の出版文化で描写された弘智法印の伝説や、法印が著名であったこと、さらに江戸期の即身仏修行者に対する影響をめぐっては、先行研究において未だ十分に説明されていない。現存最古の即身仏であり、長期的に見れば、最も著名な即身仏でもある弘智法印について、旅行や演劇、出版の文化が盛んであった江戸期という背景における思想史的位置付けを提供することが本研究の重要な目的の一つである。

注

- 1 横山重 『説経正本集』第三「弘知上人」解題
- 2 劉慶 『説経の都市芸能化』大阪市立大学大学院文学研究科COE報告 http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/2006/ja/issue/pdf/pdf_0309city-fiction/11liu.pdf
- 3 笠原一男 1978 『近世往生伝の世界—政治権力と宗教と民衆』教育社、152頁
- 4 内藤正敏 『日本のミイラ信仰』京都 法藏館 1999年 33頁

参考文献

- 阿部泰郎、山崎誠編集責任 2004 『往生伝集』東京国文学研究資料館
墨川亭雪麻呂撰（著）歌川國直畫（図）『弘智法印崑 [イワ] 阪廼松』
阿部泰郎、山崎誠編集責任 2004 『往生伝集』東京国文学研究資料館
鳥越文蔵、チャールス・ダン共編 1966 『古典文庫 第224冊 古浄瑠璃』古典文庫
佐野文哉、内藤正敏 1969 『日本の即身仏』光風社書店
劉慶 Liu Qing 『説経の都市芸能化 大阪市立大学大学院文学研究科COE報告 http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/2006/ja/issue/pdf/pdf_0309city-fiction/11liu.pdf』
内藤正敏 1999 『日本のミイラ信仰』法藏館
横山重 1968 『説経正本集』第三「弘知上人」解題 角川書店